

① 「ミャンマー自転車紀行、1011 km - 全 15 行政区のうちシャン州やカレン州など 9 行政区を走行-」  
サイクリスト、通訳案内士 (Licenced guide)、会社員 芳井 健一

自転車で世界の街道を走破している。今回は、2012 年の旧正月、1 月下旬にミャンマーを訪れた際の見聞録をお話したい。

ミャンマーへは、これが 4 回目の訪問で、これより前に、タイの 3 カ所の国境からボーダーパスを取得して日帰り入境したことがある。ミャンマーには外国人に開放されていない区域があるため、前半はシャン州ラーショウから世界遺産のバガンまで、後半はカレン州パアン郊外からヤンゴンまで走った。

前半の街道は、昆明からマンダレーまで続く ASIAN HIGHWAY (AH) 14 のミャンマー区間に相当する国道 3 号線を軸とした。中国雲南省に隣接するシャン州、マンダレー管区、サガイン管区、マグウェ管区と 4 行政区を走行した。後半は AH1 の一部で、ミャンマーでの国道 8 号線が中心。タイと接するカレン州から、モン州、バゴ管区、ヤンゴン管区、ユーヤワディ管区の 5 行政区を通り抜けた。因みにミャンマー行政区は 15 で、7 州 (State)、7 管区 (Region)、1 連邦地区 (Union Territory) から構成される。

ミャンマーは、敬虔な仏教徒の国というイメージがあるが、宗教も多彩である。風土、人、食事など、素顔のミャンマーを紹介したい。

② 「タイ王国の歴史と食文化 - タイ料理の特徴と地方色 -」

アジア料理研究家、日本タイ料理協会理事、スタジオアロイ主宰 酒井 美代子

アジアで唯一、外国の植民地になることなく、独自の文化と発展を遂げて来たタイ王国は、周辺の国々の影響を受けながらも独特の食文化が、ある。

13 世紀初頭、中国雲南省辺りに住んでいたタイ族が南下。現在のタイ国の地には、モン族のドラバラディ国、マレー人のシュリービジャヤ国、クメール人のクメール国などがあったが、同化しながらいくつかの小国家を形成していった。それらの小国家がまとまり、1238 年、スコタイに最初の王朝ができた。スコタイ王朝と併行して北部のチェンマイにランナータイ王朝が建国される。スコタイ王朝はアユタヤ、トンブリ、チャクリと各王朝時代を経て、現在のタイ王国が形作られていった。歴史を学ぶと、それに伴って培われていった食文化が分かる。タイ料理の特徴と味の特徴を知り、そして料理を下記のような地方色に分け、スライドを用いて紹介する。

- 1、タイ文化圏の山岳民族の食事—シーサンパンナ等
- 2、北タイ：チェンマイ、カントーク料理
- 3、東北タイ；コンケーン、ラオスの影響を受けたソムタム、ガイヤーン等
- 4、中部タイ；バンコク 王宮料理、
- 5、南タイ；ハジャイ カオ ヤム、ストウ等

③ 「茶と雲南 - 中国と日本の資料、医薬書から見える茶の姿 -」

人間文化研究機構「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」共同研究員 岩間 真知子

雲南は茶樹の原産地と言われている。また雲南で造られる普洱茶は、独特の風味と効能で知られ、日本でもダイエット効果のある茶として人気がある。しかしその地の茶の歴史について

は、あまり知られていないのではないだろうか。

前漢には、雲南で茶樹の栽培が行われたというが、唐の陸羽『茶経』の八之出（茶の産地）に雲南の記載はない。晩唐の樊綽による雲南の地誌『蠻書・雲南管内物産第七』には、雲南で茶が採れ、椒や薑、桂と一緒に煮て飲んだとある。

その後、元代の『雲南志略』にも茶の交易が記されるものの量は少かつたらしく、明代以降に普洱茶は発展する。萬曆の『雲南通志』、謝肇淛『滇略』に記述があり、天啓年間になると普洱茶の消費量は2000キロにも及んだという。

清初になると最高の普洱茶は皇帝に献上するようになり、政府は雲南に茶市場を作り、19世紀には「普洱茶の名は天下に遍く」広がる。そうした経緯について、分かる範囲の文献から跡付けてみたい。

#### ④ 「ネパール・ヒマラヤ地域における中国の開発案件と『仏教の政治』

##### － チベット系民族集団の目線から－

駒沢大学総合教育研究部文化学部門 准教授 別所 裕介

これまで20年以上に亘って中国のチベット地域へ通い続けてきました。20世紀末以降、世界中に影響力を拡大してきた中国は、いま大きな社会の転換期にあります。海を挟んだ東の隣人である私たちの中国理解は断片的な情報によっていつも限定されがちです。

こうした状況を打開するために、有史以来中国の西の隣人であったチベット系の人々の知恵を借りることが有効だと考えています。彼らが中国とインドという二大国の狭間で敬虔な仏教徒であり続けたことは、私たちの未来を考える上でも示唆に富んでいます。本発表では、中国が「アジア仏教の盟主」たることをうたってネパールとの国境地域で進めている開発案件を取り上げ、日本を含むアジア諸地域の「仏教をめぐる政治」の動態を幅広く視野に収めながら、ヒマラヤを越えて南アジアへ出ていこうとする中国の存在感がローカルなレベルでどのように受け止められているのかについて、在地のチベット系民族集団の目線から検討します。

#### ⑤ 「日本人にとって山とは何か －自然と人間、神と仏－」

日本山岳修験学会会長、慶應義塾大学名誉教授 鈴木 正崇

日本列島で生活する人々の精神文化を育んできたのは変化に富む山であり、思想や哲学、祭りや芸能、演劇や音楽、美術や工芸の想像力の源泉となってきた。その中核には山に畏怖の念を抱き祭祀や登拝を行う山岳信仰があった。人々は、神霊が降臨し顕現し鎮まる山、仏菩薩の居ます曼荼羅世界の山を祈願の対象とし、霊山・霊場・聖地としての山との共感や体験を通じて日々の生活を蘇らせた。

山岳信仰は仏教と深く結びつき、寺院は山号を持ち、山名には仏菩薩や仏教思想に因む名前が多い。日本の山の神は本地垂迹の思想に基づき本地の仏菩薩が権に姿を現して「権現」として垂迹するとされ、湯殿山大権現、戸隠山大権現などと尊称された。山岳登拝はかつては一年の特定期間に限定され、精進潔斎や水垢離で身を清めて白装束で登った。山は近代以降、登山による娯楽とスポーツの場に変貌した。明治の神仏分離、近代アルピニズムの導入、モータリゼーションの発達で日本人の山に関する思考を激変させた。しかし、それは150年間の出来事に過ぎない。

山の精神史を振り返り、根源にある自然と人間のありかたを見つめ直して、日本人にとって山とは何かを考えてみたい。

以上です。